

13 暮らしのまち

かつてアメリカで学生時代を過ごしたとき、ダウントウンから人が離れ、ゴーストタウン化した歴史ある街をドライブ中の車窓などからいくつも見た。一度、車がそうした街に迷いこんだとき、人がまばらで今にも犯罪が起こりそうな雰囲気があり、一刻も早くその場を立ち去りたいと思った。小樽がそんな街になることはさすがに想像できないが、開発しやすい平地を切り開いた住宅地、ショッピングモールなどに若い世代が集中し、これまで中心と考えられていたところが閑散とする空洞化現象は、日本でもすでに各地で起きている。

若い時分に外国への憧れが強いことは理解できる。戦争中とはもかく、日本は外国との活発な交流を続け、多くのことを学んできた。日本が外国に学べることは、今後もたくさんあるだろう。しかしながら、日本の伝統や文化、日本人としての感覚といったものの伝承を、私たちは忘れてはならない。そこには、言葉では言い尽くせないほどの価値がある。もちろん、そうしたものを受け継いでいくかどうかは、自由意志に委ねられる。法律などで義務化できる類のものではないから、受け継ぎたくなる感覚や価値観といったものを養っていく他にない。そのためには、やはり教育や暮らしが大切である。

かく言う私は、アメリカ滞在中、非常に有意義で楽しいときを過ごしたが、日本食から離れることは、1週間もできなかった。本を読むときも、カーペットが敷いてある自分の部屋の床に、寝転がってばかりいた。夏休みに日本に帰り、花火を見る暇がなかったことをとにかく残念に思った。

温かいご飯や魚を食べ、お味噌汁や日本茶を飲む。熱いお風呂や温泉でゆっくりと疲れをとり、和室で寝転がる。夏には盆踊りやお祭りに行き、花火に風情を感じる、といったときの何とも心地の良い感覚は、長らくそういう経験を続けてきた私たち日本人の心と身体にしっかりとしみついていて、たやすく失われるものではない。贅沢と言われればそれまでだが個人的には洋と和、今と昔のスタイルの両方が存在し、状況に応じて選びとることが理想的だと思い続けてきた。そうした恵まれた環境が、小樽には古くから存在し、戦時の紆余曲折を乗り越えた上で、既に相当の歴史を積み重ねていると言える。小樽築港でのショッピングや映画、昔ながらの商店街での買い物や郷愁散歩。おしゃれに敏感な現代の若者に、今と昔、洋と和の両方のスタイルをうまく取り入れ、生活を楽しんでもらいたい。

また、以前の回で書いたように、小樽には社会教育的な学習や活動を行う環境が整い、自然にも恵まれているため、子どもや若い世代が育つには本当に良いところだと思う。仕事、まちづくり、研究、ボランティア等で活躍されているシニア世代の背中を見て学べることは数限りない。

ところで、前に書いた「全体的な土地の印象」のところで、小樽の印象を「自然、人間、文化の調和」を感じることができる世界だと書いた。私は、人間が心豊かな生活を送るためには、この3つの調和が大切なのではないかと、ということをよく考える。人間がつくったもの全般を、広い意味で文化と考えると、「自然、人間、文化の不調和」が現代的な都会の各地に見てと

れる。大きな原因は、人間がつくるものと引き換えに、自然があまりにも失われていること、そして、つくったものが、あまりにも自然と調和しないことにあるように思う。何故、極端に自然を縮小させなければならなかったのか、そして、何故、極端に不調和なものをつくらなければならなかったのか。そうしたことの影響がどれ程、大きいのかということは、なかなか計り知ることができない。その結果、あまりにも深く考えない、あるいは、考えさせない、有無を言わせぬ風潮が、高度経済成長期、スクラップ&ビルド、バブル期のような物質志向の時代には強くあったように思う。人間の精神という問題が深く考えられていなかったにも関わらず、ある意味、根拠のない前向きさのようなものがあり、この程度なら、大丈夫、他にも、ここと似たような地域は世界の各地に存在する、と考えてしまった。そうした時代を経て、やはり今、思うのは、私たちの多くが、自然、人間、文化の不調和から来る、心身への影響にあまりにも無関心だったのではないかということ。自然環境の悪化という問題について、警告を鳴らす有識者や、日々の生活の中で、同じように危機感や違和感を持っていた一部の人たちを除いて、問題を感じない、考えたくないという風潮があまりにも強かったのではないか。

日本人が古くから親しんでいる俳句という文芸には、季節を表す季語を入れる。日本には四季があり、食、行事、風習などの文化一般でも、季節がもたらす自然の移り変わりを心から楽しんできた歴史がある。手紙にもまず、季節のあいさつを入れる習慣がある。現在、地球温暖化などの影響により、かつてのような季節感を持ちにくい環境の中で、わたしたち日本人は生活をしている。日本の各地で、自然、人間、文化の不調和が加速したとき、そこに生きる私たち日本人の心の安定はどうなるのか。初めて小樽を訪れ、小樽にはこの3つの調和があると感じたときから、小樽は人にやさしい、暮らしやすいまちだという印象を私は持った。小樽市の経済、社会福祉などの現状については、専門家ではないので語ることはできない。しかしながら、自然や文化、社会の中で生きて行くための教育といった、人間が心豊かな人生を送るために非常に重要な点において、小樽というまちは、環境の整った、暮らしやすいところに見える。そうした小樽の強みについての理解が深まっていくことを心から祈っている。